

福音書それぞれの役割分析をしています。ルカ福音書とヨハネ福音書は、牧者と羊たちのモチーフが透けて見えます。マルコとマタイはそれほどではないような・・・

ご指摘の通り、四福音書において「牧者と羊」のモチーフは各書で程度やニュアンスが異なって表現されています。特にルカ福音書とヨハネ福音書では、このモチーフがより顕著かつ文学的に強調されているといえます。

1. ルカ福音書における牧者と羊のモチーフ

ルカ福音書では、イエスが失われた者を求める救済者として示されることが多く、典型的な例として「失われた羊のたとえ」（ルカ15章）が挙げられます。ここで、イエスは「罪人」とみなされる人々を「迷った羊」として捉え、悔い改めへの招きと赦しの大きさを示します。ルカは社会的弱者や疎外された人々に焦点を当てているため、牧者が失った羊を見出すために奔走するイメージは、イエスの地上での働きを的確に表す文学的モチーフとなっています。文化的背景として、当時のパレスチナでは羊飼いは貧しく、しばしば軽視される存在でしたが、そのような弱者にイエスが自らをなぞらえることは、福音の逆説的な価値観—「最後の者が先になる」—を物語っています。

2. ヨハネ福音書における牧者と羊のモチーフ

ヨハネ福音書では「善き牧者」（ヨハネ10章）の自称が明確に登場します。ここでイエスは、羊のために命を捨てる真の牧者として描かれ、羊（信徒）と牧者（イエス）の直接的な関係性が強調されます。ヨハネ特有のキリスト論的深まりの中で、羊飼いと羊は、神と人々との親密な結びつきを寓話的かつ神学的に示すモチーフとして機能します。またヨハネでは、ヘブライ語・ギリシャ語の背景において「声を聞き分ける」（ヨハネ10:3-4）という表現が、古代近東の羊飼い文化（羊は自分の牧者の声を正確に聞き分けることができる）を前提とするリアリズムを持っています。

3. マタイ福音書とマルコ福音書における相対的希薄さ

マタイとマルコでは、牧者と羊のイメージは存在するものの、物語全体を貫く支配的モチーフとしては前面に出てきません。たとえば、マタイ9:36では、イエスは群衆を「羊飼いのない羊」のように見て憐れむ場面がありますが、これがマタイの全体像を決定づけるテーマかというところではありません。マタイはよりユダヤ的文脈—律法や預言者との関係—に焦点を当てており、また「失われたイスラエルの家の羊」（マタイ10:6）といった表現はありますが、これも限定的です。

マルコ福音書ではイエスの行動的、即時的な面が強調され、物語構造もより簡潔でダイナミックな印象を与えます。マルコ6:34で「羊飼いのない羊」として群衆が描かれますが、それは主にイエスが奇跡を行う前段階の状況説明であり、深い神学的展開には踏み込みません。

まとめ

- ルカは「失われた羊」を通して悔い改めと救いの普遍性を強調。
- ヨハネは「善き牧者」モチーフでイエスの自己啓示と信徒との親密な関係を深化。
- マタイは点的に羊のイメージを用いつつ、律法と預言の成就をメインテーマに据えるため、牧者・羊モチーフは補助的役割。
- マルコは行動記述が主で、象徴的な牧者モチーフは薄め。

このように、四福音書はそれぞれの神学的意図や受容対象を背景に、牧者と羊のイメージを使い分けていると理解すると、福音書間の違いがより明確になると思われます。

福音書はギリシャ語で記されていますが、ヘブル文化の書物です。旧約時代は、アブラハム、モーセ、ダビデ、指導者は文字通りにも象徴的にも牧者でした。王である牧者、祭司である牧者、預言者である牧者、その牧者の役割は少しずつ違っています。エレミヤとエゼキエルには牧者の話もでてきます。

福音書は確かにギリシャ語で書かれていますが、その背後には明確なヘブライ的、あるいはユダヤ的な文化的・神学的文脈があります。イエスやその弟子たちは、ユダヤの宗教伝統、旧約聖書の物語やメタファーを当然の前提としていました。そのため、「牧者と羊」というモチーフを理解する際には、旧約聖書時代から続くヘブライ文化における指導者像としての「牧者」イメージが重要です。

1. 旧約時代の「牧者」の指導者像

旧約聖書の世界において、**族長、王、祭司、預言者**といった様々な指導者が、実際の放牧経験や慣用的な比喩表現を通して「牧者」として描かれます。

- **アブラハム、モーセ、ダビデ：**

アブラハムとモーセは文字通りの牧者として羊を養う経験を持ち、そこから得られた柔軟なリーダーシップ、忍耐、保護者的な姿勢が強調されます。ダビデは羊飼いとして王位についた最たる例であり（1サムエル16章）、王としても「牧者」として民を導くべき存在であることが期待されました（詩編78:70-72）。

- **王としての牧者：**

王は政治的リーダーですが、旧約の詩篇や預言書では、王は民を養い、守り、正義をもたらす「牧者」のような存在として語られます。「あなたの民を羊のように導く」（詩編78:52など）のような比喩がしばしば用いられました。

- **祭司としての牧者：**

直接的に祭司が「牧者」と明記されることは多くありませんが、祭司は霊的に民を導く務めを持ち、その意味で共同体の信仰生活を支える「霊的牧者」として機能します。彼らが行ういけにえや律法の教えは、民を正しい方向へ「牧する」行為と見なせるでしょう。

- **預言者としての牧者：**

預言者は神の言葉を伝えることで民を悔い改めに導き、真の神への帰依へと導くという意味で、民を正しい道へ導く「牧者」の役割を果たします。また逆に、偽りの預言者や不正な指導者を「悪い牧者」として告発します。エレミヤ、エゼキエル、ゼカリヤなどで、悪い牧者と善い牧者の対比が顕著です。

2. エレミヤ、エゼキエルにおける牧者のテーマ

- **エレミヤ書**では指導者層の失敗が厳しく批判され、「わたしの牧場の羊を滅ぼし散らす牧者たちに災いあれ」（エレミヤ23:1-4参照）というように、イスラエルの王や指導者たちが悪い牧者と称され、彼らは責任を追及されます。しかし同時に、神ご自身が「正しい枝」を起し、真の王なる牧者を与えることが約束されます。ここには、メシア的な牧者王への希望が込められています。

- **エゼキエル書**ではエゼキエル34章が代表的です。イスラエルの牧者たち（指導者たち）が自分の羊を養わず、むしろ搾取し、散らしていることが非難され、神自らが羊を探し出し養う「真の牧者」となることが語られます。この預言的展望は、将来のメシア的牧者、すなわちダビデのような王による理想的な治世を指し示し、それが新約時代にイエスの到来と共に成就していくという連続性が想定されています。

3. ユダヤ的背景と福音書における牧者モチーフの再現・深化

福音書著者たちはヘブライ的な文脈をよく理解しており、イエスを描く際に旧約的「牧者」のイメージを取り入れました。

- **ヨハネ福音書10章の「善き牧者」宣言**は、エゼキエル34章の文脈—偽りの牧者への批判と神ご自身が来て羊を救う約束—を背景としています。イエスはまさにその「主なる神ご自身の介入」を体現する善き牧者として現れます。
- **ルカ福音書15章の失われた羊のたとえ**は、預言書に見られる神の側からの搜索、回復の図を思い起こさせます。それは単なる倫理説話ではなく、旧約から継承された牧者-羊の文脈の中に位置づけられ、神が失われた者を再びご自分の群れへと招き入れる行為を象徴しています。

まとめ

旧約において、牧者は単なる職業イメージではなく、あらゆる面で共同体を導くリーダー的存在を示す象徴として機能しました。そこには王、祭司、預言者といった多面的なリーダー像が重なり合っています。エレミヤやエゼキエルなどの預言者は「悪い牧者」と「真の牧者」の対照を用いて、将来の理想的指導者、つまりメシア像を描きました。

福音書はギリシャ語で記されているものの、こうしたヘブライ的背景を豊かに継承しています。そのため、新約におけるイエス・キリストの「牧者」イメージは、旧約的伝統に根差したメシア的成就であり、イエスは王・預言者・祭司的な意味合いを包含した「真の牧者」として示されているのです。

マタイとマルコは、義の律法によって御国を建て上げる王としての牧者。ルカとヨハネは、罪を洗い清め死から救い出して養い育てる祭司としての牧者、というようなイメージの違いがある？

そのような区分はある程度有益な神学的・文学的読み方といえる一方で、やや単純化の危険もあります。ただ、大枠として各福音書がイエスの「牧者」像を異なる側面から強調しているという理解は、ある程度筋が通っています。

1. マタイとマルコの「王としての牧者」的側面

- **マタイ福音書**は、イエスをアブラハムとダビデに連なる正統なメシア王、律法を成就する者として描きます（マタイ1章、5:17など）。イエスは「天の御国」を宣教し、律法と預言者を成就しながら、その支配の中に人々を導く「王的牧者」として登場する面が強いです。ここで「牧者」のイメージは、主に神の民を正しい道（義の道）へと導く王としての働きと重ねられます（マタイ9:36など）。
- **マルコ福音書**は短く行動的なスタイルで、イエスの権威と神の国のダイナミックな到来を強調します。マルコ6:34で群衆が「牧者のいない羊」として描かれ、イエスは奇跡と教えによって彼らを養う存在です。ただし、マタイほど律法成就が前面に出るわけではありませんが、イエスは権威ある導き手（王的な牧者）としてのイメージをともなって人々を導いていきます。

2. ルカとヨハネの「祭司としての牧者」的側面

- **ルカ福音書**は貧しい者、罪人、疎外された者への特別な配慮と、悔い改めと赦しのテーマが目立ちます（ルカ15章の迷い羊のたとえ、23章での十字架上の罪人への赦しなど）。イエスは失われた者を探し出し、回復する「牧者」として現れます。ここには単なる王的支配ではなく、「汚れを清め、悔い改める者を神の元へ連れ戻す」祭司的働きが投影されていると見る事ができます。つまり、罪や疎外から解放し、霊的な清めをもって群れを形成する祭司的な牧者像です。
- **ヨハネ福音書**はイエスが明確に「良い牧者」(ヨハネ10章)と自称し、羊のために命を捨てる犠牲的な愛を示します。この「命を捨てる」という行為は、旧約における祭司が神へのいけにえを捧げて民を清めるイメージと響き合います。さらに「わたしは門である」(ヨハネ10:7)という表現は、羊が正しい出入り口を通して命に至ることを想起させ、霊的養い（パン、ぶどう酒、命の水）や罪の赦し（ヨハネ1:29の子羊イメージ、ヨハネ13章の足洗いなど）を通して、イエスは人々を清め、新しい命へと導く祭司的役割を果たす牧者として示されています。

3. バランスある理解の必要性

もちろん、このような整理は各福音書の特徴を強調するための一つの見方に過ぎず、マタイやマルコにも赦しや清め、悔い改めの要素はあり、ルカやヨハネにも王的、律法的成就のイメージが全くないわけではありません。福音書は複雑な文学作品であり、多面的なイエス像が交織しています。

しかし、大づかみに言えば、

- **マタイとマルコ**は、メシア王として律法と預言を成就し、神の支配を打ち立てる「王的牧者像」をより強調する傾向がある。
- **ルカとヨハネ**は、罪の赦しや清め、また命を与える犠牲的な側面に焦点を当てる「祭司的牧者像」をより色濃く描いている。

このような整理は、四福音書がそれぞれ異なる神学的視点から「牧者」イメージを展開していることを理解する上で参考になるでしょう。

正しさが回復され、聖さが回復される。救いの大きな2側面ですよね。

おっしゃる通り、聖書全体を通して救いは「正しさ（義）」と「聖さ」の回復という二大側面で描かれています。

1. 義（正しさ）の回復：

旧約聖書では、神は義なるお方であり、その民にも義なる歩みが期待されていました。律法遵守や正義、公平、公正な裁きが求められ、その不履行は罪として断罪されました。新約においては、イエス・キリストを通して人間は神に対する義を回復します（ローマ3章など）。十字架による罪の贖いは、人を「義と認められる」状態へと導きます。これがいわゆる「義認（Justification）」の側面であり、人が神の前で無罪とされる、関係が正される出来事です。

2. 聖さの回復：

旧約では、イスラエルは聖なる民として区別され、聖所や祭司制度を通じて神の聖さに近づいていくことが求められました。神は聖く、罪や汚れを忌む方であり、その民も「聖なる者」となるよう促されていました。新約では、イエスによる罪の清めを起点として、聖霊によって人は内面的に造り変えられ、神に似た聖なる生き方へと整えられていきます。これが「聖化（Sanctification）」の過程であり、日常の歩みを通して、神の品性を身につけていく道のりです。

まとめ：

- 「義」の回復は主に神との関係が正しくなること、法廷的な無罪判決のように人が正しいとされる点に焦点があります。
- 「聖」の回復は人の内面や生活様式が神の本質に近づき、靈的・道徳的に浄化されるプロセスを意味します。

両者は車の両輪のように不可分であり、救いの完成に向かう道筋を示します。義の回復は关系的、法的地位の変化を強調し、聖の回復は品性と実際の生き方の変容を強調します。この二つがあって初めて、神の前においても、生活の実際においても、人は本来あるべき状態—神との調和ある豊かな命と交わり—を取り戻していくわけです。

最初にエデンの園にあった二つの木。善悪を知る木といのちの木のモチーフですね

エデンの園における「善悪を知る木」と「いのちの木」のモチーフは、人間と神との本来的関係、そして救いにおいて回復されるべき二つの側面（義と聖）を考える上でも極めて象徴的な役割を果たしていると考えられます。

1. 「善悪を知る木」と義の側面

善悪を知る木は、人間が神との素直な信頼関係と従順から逸脱し、「善悪を判断する主権」を自ら得ようとする試みを表します。ここでの罪は、神の秩序や義（正しさ）から離れ、自分で基準を立ててしまう傾向が象徴的に示されています。この結果、人間は「義の状態」を失い、神との正しい関係が破れてしまいます。ここで「義」とは、神の前で罪なしと認められ、正しい関係を持つ状態といえますが、それが崩壊してしまうのです。

言い換えれば、善悪を知る木の食事は「自律的な義」の主張であり、結果として「不義」と断罪される状態への転落を招きました。これは聖書全体を通して回復されるべき第一の側面、「義認」の問題、すなわち人が再び神の前で正しいとされることへの必要性を暗示しています。

2. 「いのちの木」と聖の側面

これに対して「いのちの木」は、神のいのちと直接的な交わりを象徴します。この木の実を食べ続けている限り、人は神との親密な関係、すなわち「聖なる状態」にとどまり、永遠のいのちと祝福を受け取り続けます。ここで「聖」とは、単に罪のない状態というより、神と親密に結ばれ、その品性にあずかり、神に近い存在となることを意味します。いのちの木が示すのは、まさに「聖別（聖化）」された生、すなわち神との深い交わりの中で靈的・道徳的に純化され、命にあふれた状態です。

アダムとエバは罪によって、いのちの木へのアクセスを失いました（創世記3章後半）。これは聖なる交わりの断絶を意味し、以後、人類は神に近づくために祭司制度や生贄、律法、そして最終的にはキリストによる贖いと聖霊による内的刷新が必要となります。

3. 二つの木をめぐる救済史の展開

このように、

- 善悪を知る木は「義の喪失」を象徴し、
- いのちの木は「聖の喪失」を象徴していると言えます。

人類は罪によって義を失い、聖からも遠のいてしまいましたが、救済史を通して神は、まず十字架によって人を義とし（正しいと認め）、さらに聖霊によって人を聖へと導き、いのちに満ちた永遠的な交わりへ回復していただきます。これは「義と聖の回復」という救いの二大側面を、創造原初の二つの木のモチーフが予型的に示していたと捉えることができます。

最終的に黙示録で再び「いのちの木」が登場し（黙示録22章）、完全な交わり、聖なる都において、人々は神と直接共に生きる状態が回復されます。この流れは、エデンから始まってエデンへと帰る、いや、さらに豊かに完成する救済史の大きな物語として理解できるでしょう。

マタイは、どちらかということ「教える」牧者であることが強調され、ルカは、どちらかということ「癒し養う」牧者であることが強調されているように思います

その解釈は、各福音書の神学的・文学的強調点から見てある程度支持できる見方だと思われます。

1. マタイにおける「教える」牧者像

マタイ福音書では、イエスは「教えの権威」をもって現れ、人々を律法の真の意義へと導く教師としての側面が顕著です。マタイには5つの大きな教えのブロック（例：マタイ5-7章「山上の説教」、マタイ10章、マタイ13章、マタイ18章、マタイ24-25章）があり、これらはモーセ五書に対応すると考えられ、イエスは新たな「律法教師」としてのメシア像を示しています。

ここで「牧者」の要素が完全にはないわけではなく、例えばマタイ9:36では「羊飼いのいない羊のように弱り果て、打ち捨てられていた」群衆へのイエスの憐みが語られます。しかしマタイでは、この憐みがすぐに「働き人」を求めて弟子たちを派遣する教えにつながるなど、牧者としての導きは教育的、訓戒的、律法成就的な文脈で展開されます。つまり、イエスは誤った道を歩む民を正しい義の道へと導く「教える牧者」として前面に出ています。

2. ルカにおける「癒し・養う」牧者像

一方、ルカ福音書では、イエスはしばしば罪人、病人、社会的弱者などを直接的に癒し、受容し、悔い改めを促して回復する姿が強調されます。ルカ15章には有名な「失われた羊のたとえ」があり、迷子の羊を自ら探し出して喜ぶ牧者像が描かれます。この例えは一方的な恵みと回復に焦点が置かれ、教訓的要素よりも救済行為そのものへのフォーカスが強いと言えます。さらに、ルカはイエスがサマリア人、女性、貧困者など当時周縁にいた人々に対して特別な関心を払っている点でも特徴的で、この関心は癒しや食事の交わり、赦しを通して弱っている者を「養い育てる」姿として表れます。

3. バランスの必要性

もちろん、マタイでも癒しが記され、ルカでもイエスの教えは無視できません。しかし文学的な強調や並べ方、構造を考えると、マタイではイエスは律法を完成させる教師としての威厳を備えた指導者的・王的牧者像が目立ち、ルカでは滅びゆく者、傷ついた者を探し出し、霊的にも肉体的にも「養う」ヒーラー的・祭司的牧者像が浮き彫りになります。

このように見れば、マタイとルカがそれぞれ異なる側面から「牧者としてのイエス」を描き出していることが理解できるでしょう。